

る。

「新發現十二世紀初阿拉伯人關於中國之記載」は思想與時代月刊第四一期に載つたもの。アラビア人の Sharaf al-Zaman Tahir al-Marvazi の著 The Natural Properties of Animals が一九三七年に發見され、ロンドン大學のミノルスキー氏の地理篇に注釋を加え Marvazi on China, the Turks and India として發表したが、中西交通史・宋遼史に資さんことを希つてその中國の部分四三節を紹介したもの。

以上甚だ雑駁な書評に終始し、南朝關係の論考などを省略したがご容赦願いたい。

これまで周一良氏は特殊研究の論文を中心に發表されてきたので日本では關心を呼ばなかつたようであるが、この一文が周氏の一連の研究に關心をもたれる一助になれば幸である。

なお周氏について一言觸れると、少くとも文化大革命前までは北京大学歴史系副主任、アジア・アフリカ學會理事などの要職に就かれていた。「人民中國」一九六三年版に「日中友好史話」を連載されていたのでご記憶の方もあろう。最近は鑑眞研究で著名である。「牟子叢殘」の著者、周叔迦氏（全國人民代表大會代表・佛教協會副會長）は家叔に當る。

文化大革命も終息しつつある現在、氏のご健在ならんことを祈りつつペンを置きたい。

（朝野 浩之）

The Boxer Uprising—A Background Study—

Victor Purcell

Cambridge University Press. 349 pp.
1963

本書は勿論義和團暴動を研究するものであるが、その副題によつて知られるように、アヘン戦争以後の外壓という外部的要因、或いは中國社會そのものの中にある内部的要因、即ち義和團暴動への背景を明らかにすべく研究されたものである。従つて、本書の前半部を、清朝末期の社會狀勢、西歐の中國への衝擊、列國の利權獲得鬭争等にさいて、義和團暴動への導入とし、そしてその重點を後半部の、義和團が有名な「扶清滅洋」のスローガンを採用したのは、如何なる時點において、又如何なる理由によつてであるかを究明することにしている。ここに著者は力點をおいて、それをめぐむる問題の解明を克明に追及していく。以上のことを、著者は先學の研究に依據しながら論を進め、後半部においては、「義和團資料叢刊」「義和團檔案史料」等の根本資料、若干の歐米資料をも驅使して、著者独自の検討を加えている。

本文の紹介の前に、著者 Victor Purcell について一言すれば、氏はかつて中國に滞在されたこともあり、四十年以上にわたつてアジア史の研究にたずさわり、一九四九年以來はケンブリッジ大學の極東史の講師をされ、著書も中國の文學・教育、近代中國、東南アジアに關するものなど、既に十冊以上を上梓されている。一八九六

年生れといふから、六十年代半ばでこの研究書を刊行されたこととなる。義和團暴動にいたる背景を多方面から接近しようといふのであるから、多年にわたる中國研究の著者にして可能な仕事であつたと思ふ。章は次のようになってゐる。

第一章 The Manchu government and its armed forces

第二章 Chinese society during the late Ch'ing period

第三章 The impact of the West

第四章 The battle of the concessions

第五章 Reform and reaction

第六章 'Anti-foreign' or 'anti-missionary'?

第七章 Sects and rebellions

第八章 The reappearance of the Boxers

第九章・十章 'Pro-dynastic' or 'anti-dynastic'? I, II

第十一章 Boxer beliefs and organization

第十二章 Triumph and fiasco

Conclusion

他に附録二篇(景善日記・教會資料)脚注、文獻解題、索引、地圖二葉、他計三百四十九頁の本である。以下章に従つて、紙數の許す限り、その本文の内容の紹介に重點をおいていきたい。

第一章 義和團暴動がもし「謀叛」であるなら、それは清朝政府に對する謀叛としか考えようがない。そこで著者は、義和團が一九〇〇年の危機の際、うわべだけでも支持したその清朝政府の性格、と義和團と一八九九年には戦い、一九〇〇年には協同した、その清朝政府軍の性格を概念化する必要を考え、まずこの章を設けて考察する。著者は、中國に西歐からの衝撃があつた時、異民族王朝が中

國を支配していたのは中國の不幸であつたが、しかし清朝は決して中國人に不人氣な王朝ではなかつた、清朝も中國觀念に忠實であり、政策の手段も正統的な儒教主義に基づき、又中國人も清朝に忠實であつたといふ。異民族滿洲の中國支配といふ異常な状態をまず考慮に置いておいて、さて義和團暴動が中央直轄地からおこつたので、政府が重要な影響を與へたとし、中央政府の機構から検討する。軍機處・六部も結局はヨーロッパの内閣の役割をもたず、命令はすべて皇帝自身から發令される皇帝獨裁的な政治機構を紹介し、それで Douglas, Parker, Giles らが主張してきた「中國政治の全制度を貫く民主主義精神」に觸れるが、著者はこの意味を西歐人に理解させることは困難だと批判的である。又重要ポストの滿漢併用主義も、有能な漢人官僚の影響力が増していくことを報告し、特に一九〇〇年夏の義和團暴動を考える場合に重要な事實として、太平天國の亂後、清朝支配權の衰退していく中で、廣汎な地方自治が與えられ、南方總督や袁世凱が中立をとり得たこと、結局、地方は中央と關係少い獨立したユニットとして存在していたことを指摘する。それに關連して總督・巡撫の役割について説明を加えるが、すべての權力は皇帝に集中し、如何なる政治機構にもすべて分割統治、抑制均衡の政治理論が實施されていると結論する。ついで清朝の軍隊制度について、清朝の中國支配の成功は軍隊によるところ大であつたが、その末期における變質の過程をのべ、正規兵たる八旗の他に、動亂の年に募集兵などが多くできるが、清朝の大きな仕事は、彼らの勝利の後に、それをどのように清朝の統制下にいれるかである。ここでも抑制と均衡の理論が注意深くとられる。この指摘は後の義和團が團練として政府公認のものかどうかで重要だと思

う。中國軍隊の近代化への改革が、アヘン戦争の敗北後でも全然認識されず、同治中興でも僅かしか成功しない中で、太平天國の亂時曾國藩によつて行われた軍隊の再編成は中國軍隊史上重要な一頁を畫するといひ、清末このような團練の重要性が漸次増加し、かくて朝廷の安全は、郷紳階級の忠誠と善意にたよるようになったという。そして日清戦争の敗北が、西歐式裝備による近代的軍隊の副産物を生んだ。張之洞の自強軍と袁世凱の新建陸軍がそれである。しかし兩者は義和團當時、中國保有の唯一つの近代的軍隊であつたが、結局義和團とは戦争をしなかつた。戊戌政變後、武科擧が復活し、榮祿が武衛軍を組織し、こうして義和團暴動に至る軍事面の過程をのべる。

第二章 この章では、義和團暴動がおこつた社會の本質は何であり、謀叛に賛成し、或いは反對した勢力は何であつたかが扱われる。主として歐米の先學の業績を参照しながら論を進めていく。「前科學的時代」の三人の歐米の研究者、Parker, A. H. Smith, R. K. Douglas の仕事や、最近の Chang Chung-li 「The Chinese Gentry」などを中心に引用して、中國が「一つの巨大な民主主義」の社會であると論じていること、中國に世襲的な貴族階級がなく、これが皇帝と人民の間の有用な結合を奪ひ、外國の侵入に抵抗できず、人民の熱望を中和・指導できなかつたことを紹介して、Chang Chung-li についてはかなり多くの頁をさいて、郷紳階級が決定的に特權の階級であり、指導的階級であり、従つて「民主主義」社會も極めて限定された概念であることをのべ、著者もこれに賛成している。即ち、士大夫・讀書人階級が中國社會に獨得なものであり、彼らは資本主義の發展に敵意を有していたことをのべ、一方人民側

については、彼らの租稅負擔は、Seiser が言うようには軽いものでなく、租稅の過重、銀價の高騰、地方政治の腐敗が農民を貧困へ追いやり、これが暴動への土壌となつたと説明する。「中國には代議制がない、従つて人民は暴動の權利をもつ」には、著者は太平天國の例においてすら、必ずしも成功の保證はないと指摘する。そして儒教が、支配階級にはもとより、中國社會に卓越した宗教であつたことをのべ、農民を直接支配するあの贅澤な保甲制も、そのイデオログの根底は儒教主義であつたという。最後に毛澤東の一九二六年の階級分析は、全體として一九〇〇年の中國にあてはまるが、義和團暴動が、何故特別な地方で、特別な型をとつたかに注意する必要があるとしてこの章を終る。

第三章 義和團暴動の様相は明らかに anti-foreign 特に anti-Hope であつたから、その感情をつくつた「西歐からの衝撃」は如何なるものであつたかがテーマである。著者はまず、西歐の中國侵略の過程が西歐資本主義の發展の過程と一致することを示し、それが中國社會に重要な變化を生み、半植民地の道を辿らせ、中國獨自の發展が阻害されたと結論する。ついで中國と西歐とは何故「衝撃」したのかを検討する。それは單に發展段階の異なる二つの社會の間のものでなく、異なる世界觀を有する二つの文明社會の間のものと指摘する。中國人は西歐人と異つて、調和する共同社會の概念は、外部の權威からの命令によるのでなく、内的良心に従順だといふ事實からくる、そしてこの世界觀が中國人の法概念を決定したと。西歐では法は神聖で犯し難く、行動の規範であるが、中國人は道德のルール、自然の秩序を確認するだけだ。この法と道德をめぐる「責任の概念」の相違が兩者を衝撃させたといふ。以下、アヘ

ン戦争、アロー號事件、南京・北京兩條約などにふれ、特に天津條約によるキリスト教公認の結果、その數は比較的少なかったが、影響が大きく、各地で紛争を惹起する過程をのべる。このような外壓に對して清朝や官僚は西歐に對する認識が乏しく、その態度も一貫しないことをのべ、洋務派官僚も革命的でなく、ただ現存の秩序を墨守するだけで、同治中興の挫折の理由を検討する。その後、マーガリー事件、芝罘條約、清佛戦争、日清戦争と續く外壓にふれ、特に日清戦争による敗北が、決定的な影響を興えたとし、最後に近代化に成功した日本との比較を行なっている。

第四章 一九世紀末期帝國主義段階を迎えた列國の世界政策は、その利害關係によつて複雑な様相を呈し、日清戦争後の、列國の勢力範圍の設定、利權獲得闘争は、まさに頻死の中國の生體解剖であり、この章では、中國と列國との關係、列國相互の國際關係がとりあげられる。一八九五年までの英は、中國を露に對する岩と考えていたが、日清戦争でその構想が崩れ、その後は極東で如何にして佛・露を中立化させるかが關心の的であり、日本に干渉することによって一致した三國も、その後は夫々の利害關係で互いに牽制していたことをのべる。このような情勢の中で、英・佛による雲南地方の分割と、露の滿洲への經濟的進出をみる。三國干渉後の獨は、露を極東問題に専念さすことでヨーロッパにおける露・佛關係を弱化せしめようとし、カイザーの「黃禍論」はその爲に言ひ出されたものといひ、中國では英・露との利害衝突を避ける爲、山東半島へ進出しようとしたところ、うまい具合に一八九七年十一月獨人宣教師殺害事件がおこり、翌年膠州灣租借、鐵道施設、鑛山採掘權を得る。これが後、利權獲得運動を激化させる先驅となった。この間露が何故朝

鮮に港を求めなかつたのかという疑問をさしはさみながら、露の遼東半島獲得の経緯をのべる。中國がこのように列國に屈服していくのも結局は列國の不可避の敵對關係にあるという。その後再び西南シナをめぐる英・佛の對立と、利權獲得、伊の三門灣要求と拒絶にふれ、最後に米の門戶解放政策をのべて、義和團暴動前夜の國際環境の説明とする。

第五章 日清戦争後の改革への道、西歐化への避け難い過程としての戊戌變法と政變についての説明である。まず康有爲に關し、彼は本質的には保守的改革者であり、「大同書」の中の utopia 社會も、革命によつてではなく、傳統的王朝の組織内で得られるものと規定する。戊戌變法で改革者の一番の關心は、又それ故に反動派の猛反撃を受けたのが科擧の改廢であつたので、これに關し具體的な八股文・答案の事例をあげて説明する。そして改革者が西歐を標準にしたのなら、どれだけ西歐の本質が理解されていたかと自問し、答は恐らくゼロだと自答する。それは一八九八年までの西歐書籍の翻譯リストによつても、それが改革者には有益でなかつたとし兩者の關係を否定している。以下翻譯事業を詳細なデータに基づいて行ない、それを餘り多く買ない中で、嚴復の業績は高く評價している。最後に著者は、改革者の目的と義和團を形成する無學の農民との間に如何なる關係があつたかと問ひ、改革の失敗はあらゆる階級の中國人に消極的な排外思想を抱かせ、それが宮廷反動派と義和團に共通の基礎を興え、同時に初期の義和團と反動派の民族的愛國主義は積極的で本物であつたと指摘する。

第六章 義和團暴動が anti-foreign で anti-christian は争えない事實だが、外國勢力に對する反感の要素と、教會に對するそれの

検討である。鎮定後に出版されたものは、教會活動を辨護するものが多いが、北京條約以來、教會勢力の浸透により、中國人は教會に對し非常な敵意を有し、外國人宣教師は「第一の惡魔」中國人改宗者は「第二の惡魔」ともに死に値するといふ。教會がかくまで嫌惡されるのは、中國人と西歐人の宗教觀の差によると著者は言う。中國人は道教の影響で、仙・不死と信じてゐるが、西歐人は、肉體と精神を切離して考へる。つまり救濟感が異なるという。だから中國人は、魂の救濟・天罰を信じてゐるよりは、教會は外國勢力の代理であると考へる方が容易である。一方外國勢力に對する反感の要素としては、中國人が外國に對する屈辱の證據とみなす條約問題、自主權を全く喪失した關稅問題、領事がしばしば容喙して外國人・改宗者側に有利にはかろうとする訴訟問題、鐵道建設による墓の移轉、條約により提供する土地問題、日清戰爭後、常に戰爭で脅す外國領事の横柄な態度等をあげる。この章における著者の結論は、義和團は「會」であり、anti-christian の性格の強い宗教的祕密結社だと規定してゐる。

第七章 著者は序文において自分の研究の重點は第七・十一章に置いてゐるといふ如くこれより敘述も克明に詳細になつてくる。まず著者は、中國人は由來宗教に關し寛容であると言われるが、その寛容さは、邪教・祕密結社には及ばないといふ、Vincent Shih の歴代農民暴動の分析の成果、陳勝、吳廣、劉邦、赤眉、黃巾、黃巢、宋朝（王小波・五斗米道・方臘）白蓮教、元末の暴動、明末の流賊の九つをとりあげ、これらが多くは宗教的信念に基づき、經濟的には土地税に關心を集中するが、せいぜい人間皆平等を主張するに過ぎず、新社會への政治的・經濟的・社會的プログラムやイデオ

ロギーは乏しかったことを示している。この中で、義和團と關係の深い白蓮教についてその發生、一八世紀末からの大亂、清朝の對策、この間に各地に團練が作られる過程をのべ、この中で著者が特に注目しているのは、この當時の別の亂、天理教の指導者李文靖と義和團時の指導者朱紅燈との系譜である。ついで義和團と白蓮教の異同について、兩者とも道・佛に基く宗教團體で、訓練によつて不死身になることを願ひ、明裔を稱する者がいる點は共通だが、ただ一つ異なる點は重要なこととして、義和團は pro-dynasty であつて anti- ではないと指摘する。ここで著者は義和團の起源に關し、勞之宣「義和拳教門源流考」をとりあげ、それが白蓮教系の八卦教の一支流であり、典型的な祕密結社であることを紹介して、著者もこの説に従つてゐる。ついで南方の祕密結社天地會にもふれるが、清朝最大の農民暴動・太平天國の亂を抽出して、頁をさいて、洪秀全その人、兩司馬による管理機構、その目標、失敗に終つた理由を扱つてゐる。この章は義和團を研究する場合、それが歴代農民暴動の中でどのように位置づけられるか、その目的がどう違ふか比較研究の意味で豫備知識を與えるために設定せられてゐる。

第八章 いよいよ義和團の再現に入る。日清戰爭後列國の經濟的進出に伴つて各地で anti-foreign, anti-christian の運動が頻發してくるが、一九〇〇年の暴動が何故、宮廷に傳統的に忠實な直隸・山東から起り、その逆の華南から起らなかつたかの疑問をなげ、それへの接近として、獨の山東、露の滿洲への進出、一八九七年江蘇饑饉の難民の當地への流入、連年の華北における洪水・旱魃をあげ、著者が重視するのは、日清戰爭敗北後の軍制改革による影響である。一八九七年末より次々に出される、不要・老令將兵の整理

特に直隸・山東での團練の組織の命令である。これが失業軍人を秘密結社や無賴漢の仲間に入れ、華北の社會不安を醸し出したという。ついで Steiger の説を紹介して、彼が「義和拳が會と呼ばれた證據はない」には資料を提出して反對する。又 Steiger が義和團は西太后の要請に應じてできた義勇兵による團練、即ち合法的軍隊という説には、彼は牧師のような不確實、情報に基いていると贊成しかねている。その點に關しては Chester Tan の「義和團は帝國の勅諭に應じて組織されたものでない。何故なら一八九八年十一月五日、最初の團練の組織命令のあった以前に、既に存在し活動していた。清朝や地方政府が、くりかえし義和團を團練の中に入れて統制しようとした事實は、それらが異なる二つの實體であることを證明している」を引用している。もつと Steiger も義和團は十一月までは locus standi をもたなかったと言っているに過ぎないが。この後、著者は、勞乃宣説をめぐる Steiger, Ton, 村松祐次氏、市古宙三氏説を比較し、著者は自己の見解として、義和團という名稱はあまりに單一化すぎ、多くの異った要素を含む（例えば大刀會）から、義和團を徹底的に追求するには、下關係約直後から検討する必要ありとして、それを主として「義和團檔案史料」に基づいて綿密に追求していく。一八九六年七月二日、劉坤一の山東大刀會に關する報告に始つて、山東巡撫を歴任した李秉衡、張汝梅、毓賢と軍機處との間の大刀會に關する往復文書である。その中で著者は特に九八年五月二十二日の張汝梅の報告に注目する。それは義和團自身に變つていく新しい結社の出現に關する報告である。

第九章 前章最後の張汝梅の再調査の報告から始る。張はこの直隸・山東の境界に組織された「義民會」は新しい組織で、地方政府

が正規の民團にかえようとしたもので、實質義和團だと確信もつていた。かかる時九九年四月、毓賢が山東巡撫に歸任したことが、義和團の歴史の轉換期になったことを著者も確認する。しかし毓賢「義和團は清朝に對して心配の種にはならない」というが、これに關し、九九年十月平原事件の時、毓により免職された蔣楷の記録を引いて、指導人物朱紅燈の人物や名前の由來からして、それは事實に反すると斷言する。そこで著者は毓の眞の態度は何であつたかと問う。彼が「義和拳」を「義和團」と改稱したので、旗にも「毓」字を記したのは、恐らく毓が山東巡撫になる九九年四月以降のことだと想像する著者に従うとして、彼の平原事件に關する最初の公式報告は十一月八日で、この中で事件は信者と拳民の不和から生じたと報告し、毓のこの指摘が、清朝の外國に對する政策を硬化させたという。丁度この時、伊艦隊が山東を巡航して國際危機が再び迫り軍機處は全總督・巡撫に命じて國防を強化させ、一方毓は米國の壓力によつて袁世凱に更迭された。この直後の毓の報告は、彼と義和團の關係を示して重要だと言う。即ち事件は一般民と信者との誤解から生じたが、基本的には信者が一般民を侮辱し、後者が前者から多くの不正をうけた事から起つた奴才（毓賢・報告の中で自分をこう稱する）は、就任以來八回以上、義和團結社や拳拳實施を禁止する聲明を出し、教會近邊に軍隊を警邏させて信者を保護して、それなりの効果があつたし、又朱紅燈が逮捕された時、毓は彼らを「無法の惡漢」と報告している。しかし毓が平原事件で、自分の部下蔣楷や指揮官を狀況判斷を誤り無實の人を多く死に至らしめたとして處分したのは、義和團を元氣づけ、清廷にも心理的影響を與えたのは事實だろうという。戊戌政變で勝利した反動派は、彼の報告

で列國に對する態度を硬化させ、又光緒帝廢位計畫を外國公使（特に英國）によつて反對された西太后・反動派を一層反外に向わせたが、義和團に對しては鎮壓と慰撫の間を彷徨つた。しかし一方、平原事件の失敗、指導者の處刑は、義和團をして、pro-dynasticの線を辿らしめたという。にも拘わらず彼らの出自の母體には疑いもなく白蓮の反王朝的目的が残つていたと指摘する。

第十章 著者は、義和團の構成を「pro-dynastic と anti-dynastic の二つから形成され、それは義和團が清朝の支持を得た後もそうであつたと、まずその構成要素の雜多性を指摘する。そこで著者は、前者の例として、「扶清滅洋」(Support the Ch'ing; Destroy the Foreigner) を唱えた李來中と、後者の例として、九九年八月「翻清滅洋」(Overthrow the Ch'ing; Destroy the Foreigner) を唱えて勢力を伸ばして清朝軍と戦い、十月平原事件の時再び反亂した後、逮捕、處刑された朱紅燈の二人の指導者に注目する。そして著者は、現代中國史家は Jerome Ch'ên を除いてはこの重要な anti-dynastic から pro-dynastic への運動の性格の變化の問題に注意を拂う研究家がないと批判する。范文瀾は言及してはいるが、彼が、「扶清滅洋」のスローガンを採用したのは朱紅燈だとか、毓賢が九八年の勅諭に従つて「義和拳」を「義和團」と改稱したとかいうのは、誤りであると指摘する。しかし范氏の分析、義和團は秘密結社の塊集積で全體の指導者がなく、destroy-foreigner では一致するが、清朝に對する態度では一致せず、それには anti (敵) support (扶) preserve (保) と三種あり、後二者は滿洲貴族によるもので、最初のは白蓮教系で運動中ずつと存在したこと、西太后が北京脱出後、景廷賓が「掃清滅洋」(Sweep away the Ch'ing;

Destroy the Foreigner) の新しいスローガンを掲げる中で、義和團本來の性格を再現した、には贊成の模様である。著者は、「扶清滅洋」を最初に唱えた人物を朱紅燈とするのは、蔣楷が記録に残していない點から無理だとするが、その最初の人物はそのスローガンの出現の時期ほど重要でないと言ひ、その時期を九九年九月までではないかと言ふ。もっとも Isore 神父の九八年十月二十五日(水)の日記によれば、そのスローガンを記した團員が出現した旨記しているが、著者の調査の結果では、當日は火曜日で、九九年十月二十五日なら水曜日だと言ふ。神父が誤つたのか、或いは九八年秋に清朝と同盟するもう一つの義和團が存在したことになるのか。著者が確信もつて言うのは、義和團は獨立自生的な會黨であり、獨特の土俗祭式と組織をもち、傳統的祕密革命結社であると。だから、市古氏が義和團は政府と初めから敵對し、従つて義和團と團練はその目的が違ふから、兩者の間に關係はないとする説と、これに反對する村松氏の説をとりあげて、前説の方がより事實に近かつたのではないかと言ふ。この「扶清滅洋」のスローガンが民衆のイメージを込んだという Chester Tan の指摘と、平原事件の失敗、指導者の逮捕・處刑が兩者が同時にその政策を變更させた時であり、この時こそが義和團と清朝が同一役割を始める轉換期であつたという Chen の指摘を引用する。そして著者は驚くべき事實として Chen の研究から紹介する。それは義和團が雜多な要素から成立していることを知つてゐるが、暴動中存続し續けた古い白蓮教徒が、扶清的義和團の激怒の對稱となり、百餘人が一九〇〇年七月に北京で處刑されている事實である。最後に Chen の義和團暴動史の時代區分を紹介し、「彼は心では常に pro-Manchu かつ anti-Manchu であ

つた」を引用してこの評價に賛成している。

第十一章 この章は義和團の教義や組織を扱う。その世界観はある程度は傳統的思想に由來するといひ、彼らの崇拜する神は、「三國志演義」「水滸傳」「西遊記」等の中の人物や同時代人としては李乘衡、邢篤藻（各部尙書を歴任・詩人）であることから、これらの書籍解題をやるが、これらにはプラトンの・モアの社會哲理はなく、そこから革命的モラルを抽出することは困難だと結論づけている。ついで義和團の組織にふれ、その全體を統べる指導者のいなかたことを言ひ、「義和團暴動に全體的統一がないことは、政治的背景がないだけでなく、政治的知恵のないことの證據である」といふ Chen の言葉を結論的に引用する。ついでその嚴格な規律、獨特の用語、呪文の具體的實例、又西歐人に最も理解しにくい、所謂 immortality について解説を加える。信仰や肉體的訓練によつて神を得て、最後の目的たる仙||不死となつた時、敵の彈丸や劍も防衛できるというこの幼稚な思想も、一旦神話ができると、視覺以上の働きをするもので、義和團が鎮壓され、その効力がないことが證明された後でも、華北の人々に信仰され續けたという。

第十二章 この章は義和團が pro-dynastic になつて後の概要にすぎないとい著者自身の言う所であつて、北京議定書締結までの史實を早足に迫りており、簡單にしておきたい。九九年十二月山東巡撫毓賢より袁世凱への更迭、一九〇〇年五月未水事件、この間の北京外交團の對處、シーモア軍退却、六月十六日からの御前會議、五十五日間の北京籠城等にふれ、著者は特に中國側の盛宣懷、袁世凱や南方總督の李鴻章、張之洞、劉坤一の動向、彼らが朝廷の開戦宣言を無視したことに注目し、「この大膽な決定は、南方地域を戦争の荒

廢から守り、列國と清朝の平和の道を開いた賢明なもの」と評價する。この間清朝の態度が戦争の勝敗毎に一喜一憂動搖する中で、七月末李乘衡の北京到着がその融和的態度を終らせ、反動派を鼓舞し、五人の大臣の處刑になつたことをのべる。八月中は北京陷落後の講和會議の過程、辛丑條約の主要なものに簡單にふれてこの章を終る。

結論の章 今までの著者の敘述のまとめで、まず義和團の性格に關し、Seeger 説を退け、義和團は事實において宗教的會黨であり、anti-foreign であり anti-christian であり、「この世紀世界におこつた最も重要な宗教的暴動」(J. Chen)だといふ。次にその起源、政策變更の問題については、日清戦争後の最初の大規模な秘密結社の運動は大刀會で、それは anti-foreign 特に anti-Germany であり、白蓮教の分派であり、彼らが「翻清優明」を公然と目的にしたかどうかは分らないが、pro-Ching でなかつたことは確かといふ。そして義和團が九八年五月再現した時、おびりに anti-dynastic ではなかつたとする。もしそうなら、張汝梅が害はないと見なかつただろうし、團練に吸収しようとするより鎮壓しただろうからといふ。そして「扶清滅洋」のスローガンの出現は九九年九月とし最初にこれを掲げたのは朱紅燈であるとする范文瀾説を退け、それは李來中だとする。もし朱なら、毓賢が袁世凱に更迭された時、朱を處刑すべく身柄を毓が袁に引渡さなかつたらうといふ。義和團が、このスローガンを採用した理由は、十月平原事件において anti-dynastic 要素が挫折した後、それが成功への唯一の可能であつたからであることは疑いないといふ。そしてこれが宮廷内において反動派が力をもつてくる時期と一致するといふ。そして次に世界の歴

史に義和團暴動と類似のものが存在したかと考えて、ロビンソン、至福四年説の農民革命の類を著者は頭に浮べるが、義和團の中にはそのようなニュートピアニズムもないし、彼らの規準は過去に根ざして、既成の權威を否定せず、その道德律は、道教の平等主義に制約されながらも、正統的であつたとする。次の言葉は著者の義和團暴動の評價のまとめだと考えられるので少々長いが引用しよう。

「その組織や他の弱點とは別に、義和團運動はそのイデオロギーが儒教國家の衰退の中で空白になつたものを埋めるに適當でないために、中國に好結果の制度を作り上げるのに成功しなかつた。それは太平天國に比較しても改革へのプログラムがなかつた。唯一の進歩的原理は婦人平等という原理で、儒教的意味における嚴格な道德的行爲を主唱する。そして最終の段階で役立たない官僚に代つて『民衆の保護者』の役割を果たす。しかし愛國的だとはいへ、『土地改革』とか、如何にして中國が近代社會に入っていくかの言葉がない。種痘から、ラフィンランブに至るまでの一切の近代的發明および革新が『洋』として非難される。彼らの中國への愛情、外人への敵意とは別に、義和團を驅りたてた唯一の力は、儒・佛・道三教の合成された宗教への固守であつた」として著者は西歐人に最も不合理に寫る invulnerability について、その訓練法が近代西歐醫學に顯著な効果をもつて採用されていることを、彼らが invulnerability を信じた馬鹿げた行爲を非難することはやさしい、血に喝いた行動を憤ることは正しい、がこれすら、歴史上の虐殺に比べて規模が小さいし、公使館救出後の西歐人の野蠻的行爲を見よという。中國の支配者が中國を長い間諷の中にとこめておいたので、若い文明との最初の出会いが悲劇的な結果になつたという、Peter Fleming

の Old China Hands の觀點からの評言を示して、これは現在の西歐諸國の行動にも影響を與える今日の課題でもあるという。そして今日の中國歴史家の義和團研究は、暴動が徹底的に anti-dynastic であつたことを示すに熱心しすぎると思うと批判するが、一方 R. Hart の「間違いや犯罪や馬鹿さにも拘わらず、義和團は眞の愛國的精神によつて元氣づけられた」とや Sir Reginald Johnston の「ある意味では、義和團やその滿洲擁護者が新しいナシヨナリズムの眞の先驅者であるとするのは公正でないことはない」を引用する。義和團暴動は Chester Tan が The Boxer Catastrophe というように確かに悲劇的結末に終つた。殺戮という非難だけでなく、莫大な賠償を課せられて民衆は貧窮した。しかしこの大衆暴動は、列國の中國分割の企てを阻止し、中國にナシヨナリズムを誕生させたと著者は評價する。それにしても中國が何故科學ルネサンスを行わずに、彼らの運命であつた困難な方法で近代世界に入らねばならなかつたのかという疑問を提出して全章を終る。

以上要約したように本書は、アヘン戦争以來の外壓とこれに對する反應のもたらす諸矛盾の集約的な表現とみなす義和團暴動を、その歴史的背景の中でとらえようとするものである。義和團そのものだけを抽出しようとするのではなく、それを頂點として凡そ義和團に直接・間接に關係あるものはすべて取上げて検討を加えているから、誠に視野の廣い、スケールの大きい力作となつてゐる。だから時に主題から逸脱してしまふこともあるが、一見脇道にそれた冗言と思われるものでも、最後には義和團暴動と關係づけられてくるように書かれてゐる。即ち義和團暴動をあらゆる方面から歴史的に位

置づけようとする努力が窺える。いわば中國十九世紀後半史、その中の義和團研究とも言うべきものである。そして前半部を概説的に敘述し、後半部に研究の重點をおいて、今までの研究の誤りを訂正した部分、新しく解明した部分もある。

淺學非才の筆者は、本書より色々教示をうけるばかりで、長年の研鑽の上に上梓された本書に對する批評はもとより及ぶべくもないが、なお若干の感想や希望をのべさせてもらえれば、まず、義和團暴動を見る場合、中國農民側の主體的要素、動向は何であつたかという點である。それには資料的制約があることは充分わかるし、歐米人がこの種の研究をする時、宣教師などの記録が中心になることにはある程度やむを得ないが、この方面の叙述が少いように思う。この點はキリスト教的側面からの接近はすばらしいが、中國農民側の仇敵運動については説明が少く、同様のことが言えるのではなからうか。又西歐と中國が衝撃したのは、宗教が相入れなかつたのは、夫々異なる世界觀・宗教觀をもつ社會であつたからと説明するが、それでは何故それらが違ふようになったのか、それは如何なる基盤に由來するのか、この邊の説明がもう少しほしいところである。又第四章利權獲得の章は、列國相互の利害關係の説明が中心であつて、列國が中國に種々利權を獲得していくことが、中國の人民大衆に具體的にどのような影響を與え、それが義和團暴動を誘發したのかを加えてはしなかつた。又第五章の終りで、戊戌變法の失敗があらゆる階級の中國人に *anti-foreign* の線を辿らせたところがあるが、これはどうであらうか。義和團と清朝が同盟を結んだという譯でもないだらうし、又變法派と民衆の間には斷絶があり、人民の排外運動には變法派は反對の立場をとつていたというから、これは互いに自己の立

場を有利にすべく相手を利用したに過ぎないのではなからうか。又著者は、教會をカトリックとプロテスタントに分けて兩者のいづれに責任があるかを問うている部分があるが、華北では山東の一部を除いて、みなカトリックの勢力というから、この設定はおかしいのではなからうか。義和團の再現をその名で注目されるまで延期するのは間違ひといつて、大刀會などに注目して検討するのは著者の卓見と思うが、毓賢の眞意や、蔣楨の立場などは、その報告・記録が書かれた時の情況に即して検討する必要があるはしないかと思う。

著者は大體 *Terome Chen* の説を祖述しているようで、義和團が *anti-dynastic* であるかの點で、矛盾する事をのべる所もあるが、資料も一致しないところがあり、結論も最終的でないと斷つてゐる。著者の態度は概して義和團に好意的ではあるが、複雑な要素などはそのまま提供して、決して一方的に公式的に割切らない客觀的立場をとつてゐる。最後に望蜀の言をのべるを許されれば、やはり背景だけの研究でなく、義和團暴動そのものと、それに續く北京議定書の意味を検討してはしなかつた。暴動は華北地方のそののみしか扱つていないが、四川・湖南その他ほぼ全國的に廣がつた暴動を検討することで、義和團暴動の全貌が明らかになるだらうし、後の辛丑條約の結果を研究する事で、眞の義和團暴動の歴史的意義がもっと明確になるだらうと思う。

語學力・理解力の不足から、著者の眞意の讀み違え、讀み落しが多々あらうことを恐れながら、批評には程遠く見當はずれの紹介に終つたことをお詫びして筆を擱く。

(菅野 正)